

持っていたのか、国旗掲揚・皇居遥拝・君が代合唱を終わりにかけるころ、船長が来て早く国旗を降ろしてください。日本は今、国旗を掲げることはできませんと、早速降ろされたが、みんな感激の一時であった。

次いでいよいよ船が岸壁を離れたとき、氏名を呼び五人、後甲板に出ろの命令があった。ソ連抑留中、進歩分子としてソ連の手先となり思想教育を施した者たちであった。殴る、蹴る、最後の果て綱で縛り上げ、お前たちは売国奴だ、全員の敵であった、祖国の復興を阻害するものである。日本海に投げ込んで消してやるという事件もあり、前にも事実海に投げ込まれたこともあり、船長も心得たもの、この二千余人は私が日本へ無事届ける責任があります。どうか私にまかしてくださいと言うや、船長室に別収容された。舞鶴到着と同時に進駐軍に引き渡して結末となった。

船は静かな航海を続け、日本に向かう。日本の船の一夜は殊のほかよく眠れた。十五日夜明け方、内地の山が見え始める。あの灯台は宮津港の灯台だろうとか、甲板は祖国の山々を見つめる人々であふれた。やがて船

は舞鶴港に入り、両岸からのセミの声が珍しく懐かしかった。午前十一時ごろ、終戦後まる三年の終戦記念日、祖国に上陸し、なんとか生き長らえて抑留生活に終止符を打ったのであって、生涯忘れることのできない思い出と体験を得ることができた。

ただ残念なことは不幸・病気に栄養失調に倒れ、遠くエラブカの果てに残してきた戦友と喜びを共にすることのできなかったことは、かえすがえすも残念である。遥かにご冥福を祈るとともに、こうした戦争犠牲者を出さない新しい平和な日本の建設に努力することを誓う次第である。

シベリア捕虜生活の体験

大阪府 小森 淳 男

この記録を書くに当たり、無念にも彼の地にて亡くなられた多くの戦友同胞諸氏の御霊に対し、ご冥福を祈る。

合 掌

私はシベリア生活四年にして、日本に引き揚げてきた。一年で引き揚げた人も、十数年目に引き揚げた方々もあるが、よくぞ、あの「シベリア」から生きて帰れたものと、その苦勞の度合いは違っている、それぞれが感じておられることと拝察する。生きて帰れば、ご家族や親しい方に苦勞話や、またその中で楽しい話の一つや二つ、お話もできようが……、亡くなられた同胞が余りにも多いので、せめて「シベリア」捕虜生活を知っていたらこうと思って、ペンをとった。

私が引き揚げて早や四十四年前のことを思い出して書くので、少々忘却していることはあっても、決して誇大表現はしない。当時感じたこと、見聞のままに体験記として書いてみた。

「シベリア」ってどんなところか、我々が捕虜として連行されるまでは、余り詳しく知る日本人はいなかったように思う。せいぜい冬季は猛烈な寒さと、夏季は湿地帯、おまけに土地は広漠で、とてもじゃないが人間の住むところじゃない。だから、ロシアでも流刑地なんだぐ

らいにしか知らなかった。

とうとう日本人捕虜が、そのシベリアのど真ん中に来てしまった。

聞くとところによると、ソ連でも、ウクライナの方は二毛作がとれるそうで、私は、そちらの地方で生活をしたことがないから何ともいえないが、そちらはそちらでまた苦勞の多かったことと思う。

さて、満州は東京城で陣地構築中だった（鏡泊湖周辺）。ソ連軍による武装解除を受け蘭崗飛行場に向かつて行進、その地にて、日本に帰るための大隊編成が組まれた。一個大隊千人ということで、私たちの大隊編成は、歩兵、輜重兵幹候隊、そして私たちの砲兵で編成された。大隊長は藤田大尉で、以前、ソ満国境の第四国境守備隊（虎頭陣地）の歩兵隊で、つくづく縁は異なものと感じた。

さあ、日本に帰るんだから、この大隊は早く貨車に乗れとせきたてられるまま、愛河駅にて貨車に乗りこんだ。貨車は五十トン貨車で、中央が入り口、左右を上下二段に仕切り、寝わらを敷き、その上にアンペラで押さ

えてあった。

貨車は緩芬河經由一路シベリア本線を西進、ウスリー江を左に眺めながら走っていたが、少々スピードが落ちたのでよく見ると、そこはイマンだった。かつて我々のいた虎頭陣地の真正面に今来ているではないか……何だか情けない気もしたが、旧陣地はどうかと隙間越しに見たが、よく見えなかったが、随分地肌を出して、白く見える箇所が多かったように思えた。

そしてハバロフスク、チタを経て大きな湖が見え出した。そうだ、バイカル湖だと思ったが、大きな波、大きな船を見ると、貨車内部のあちこちで、ウラヂオストックではないかとの声も出たが、寂しい限りだった。大体シベリア本線は、地図で見ると、バイカル湖の南端をチラッと走っているだけで、それがなんと時速五十キロのスピードで一昼夜半グネグネしながら走って、やっとバイカル湖が見えなくなる。やがてイルクーツク、そしてタイシエト駅だ。

我々タイシエト地区にはうりこまれた捕虜は、シベリア本線からお別れして支線に入る。すなわちバイカル湖

の北端にソ連の計画する第二シベリア本線が敷設中で、ブラーツクという駅があって、それを結ぶ約三百五十キロの鉄道敷設がタイシエト地区に来た捕虜の主作業だったのだ。何を犠牲にしても、短時間に列車の開通作業を終了させよ、日本人捕虜をそう長く使うこともできないだろうからと「ヴィストレー」「ヴィストレー、ダワイ」とせき立てられて一層犠牲が多く出たのではないだろうか。

タイシエトから支線五十三キロ地点にキビトクというところがあって、我々はその山の下收容所に入ることとなった。愛河駅出発以来実に十四日目であった。

これからいよいよ苦闘の捕虜生活が始まる。当時、私の偽らざる心境は、早く日本に帰りたい、毎日、毎日帰りたい気持ちだった。日本人捕虜全員の願いではなからうか。「一日が三日にも」「一年が三年にも」感じる毎日だった。

しかしこんな人に出会ったこともあった。ある屋外作業でフト出会った土着の人で、日本人によく似ているなと思って見ていたら、その人が近づいて来て「貴方たち

はそのうちに日本に帰れるからいいですよ、私は帰れません」と。ノモハンで捕虜となり、現在はソ連人妻と暮らしている長野県の人だった。それ以上余り詳しく語るうとしない日本人だった。

当時のソ連は、独ソ戦で疲れ果て、生産面でも意にまかせず、物資は不足し、労働力は日本人捕虜をあてがったのだ。ソ連の貨物列車は実に長い。その長い列車に満州にあった旋盤という旋盤は全部、電線は持ち去ったあとは暗闇となろうが知っちゃいない、こんな調子で何もかも全部持ち去ってしまった。

日本人捕虜にあてがった衣食住はどうか。

「衣」衣類は不足していて、先ほどのように日本軍から取り上げた軍服の支給だが、どれか一つ外れている、すなわち夏シャツに冬服、冬シャツのものに夏服といった具合で、どこか一つ欠けている。だから持っている衣類を全部身につけても寒くて、こんな情けないことはない。

「食」ソ連の幹部は、日本人一人当たり米飯一合分は与えていると言うそうだが、実態は三分がゆはおろか、重

湯そのものだった。

我々のいたキビトークは、ご承知のとおりシベリアの流刑地で、囚人収容所もあって、刑を終えた人がモスクワへ帰りたくても帰れないシステムになっているように、仕方なくその地の土着となって、シベリア開発の一員となっているようだ。そういう人たちがシベリア人口が増加しつつある。また自由の国ソ連でも、言論、思想は自由でなく、シベリアで多いのはやはり政治犯で、彼らはまた刑も長く、二十年、二十五年、三十年で一般に文化人、科学者が多く、諸外国のことをよく知っている知識人で、私たち日本人捕虜と話がよく合う人たちだった。

私と一対一で話していると、気晴らしもあるのか、本心が見える。彼は「スターリン、ブローホ」と言って小指を出して、それを下に向ける。万一そこへ他のソ連人が一人でも来ようものなら「スターリン、ハラショー」といって、親指を出して上向きに振るのだ。夫婦間でも本音は言えないそうだ。実に味気ないものだ。

その次に重い刑に服しているのが火災を出した人たち

で、最低十年といわれている。国の財産を消失したということだろうか、強姦や窃盗は案外軽く、強盗でも人を殺していなければ軽いようだった。だから、ソ連各地からどんな罪人を送り込み、刑を終えたと、シベリア開発要員として土着させるのだ。

彼らの食糧も配給で、一週間分を受け取っても、とても足りないから、五日くらいで平らげてしまい、後は水を飲んでいるような情況で、我々が屋外作業で昼食の黒パンを食っていると、捕虜の私たちに、パンをくれと寄ってくるルンペン風の人が結構いる。そんな人たちが多いので、日本人捕虜用食糧が搾取されたり、横流しなどあって、最終的に我々日本人捕虜の口に入るときは、三分がゆになっているのだ。

「住」住の方といえば、完全な木造家屋でもできているところに入るならいいのだが、次から次へと奥地開拓のため、人跡未踏の密林へ移動させられ、木造家屋ができるまで、テント生活なので、体力はドンドン低下し、大抵の人は参ってしまう。このような移動時期が、夏季でも夜間はオーバーが要るのだから、冬季だったら本当に

恐ろしいことだ。

ここで一年を振りかえって、シベリアの気候はどうかをみると、私の感じでは、

(春) 五月中旬から―六月初旬―約二十五日

(夏) 六月初旬から―八月下旬―約八十日

(秋) 九月初旬から―九月中旬―約十五日

(冬) 九月中旬から―五月中旬―約二百四十日

「春」五月中旬ころから雪解けで、日中はドロドロ、夜間は凸凹の状態で凍りつく。タンポポその他の草花が芽を出しはじめ、約三か月ほどで、春の花から夏咲、秋咲の順で草花が咲き、名前は忘れたが、木に白い可愛い花が咲くので、シベリア桜とよんでいた。花は咲き、虫(蚊やブヨ)がいないのは六月で、シベリアでは六月が一番居心地のよい時期ではないだろうかと思う。

また、屋外作業の楽しみの一つに「白樺水」を飲む楽しみがあった。ちょうどゴム採集と同じ要領で白樺の木にV型の窪みを作って、Vの先端に出べするように木片か小枝でつくり、その下に飯盒をおいておくと採集できる。

「夏」寒いシベリアだが、また夏は暑い。日中は三十度をゆうに超す暑さで、シャツを脱いでいるものなら、とても痛くてたまらない。長袖シャツを着ていないと大変だ。

それから、真夏にもかかわらず空が急に曇り、何だかザー、バシバシと音を立てて来たかと思うと、あられの襲来だ。地面をたたき、それが跳ね返る。初めて出会ったときは散々な目にあった。直径二センチもあるから、痛くて痛くてどうしようもない。みな躍っていた。しかし、こんな経験もみなで考え出した防衛方法は、すぐみなが集まって円陣をつくるか、状況により一列に並び、素早くシャツを脱ぎ、身体から二、三十センチ離れたところで、傘かテントの要領で防ぐ。

夏も夜間はオーバーを着用しなければ寒くてたまらない。しかし冬のことを思えばよい方なので、作業にも拍車を打たれてビッチが上がるが、捕虜の我々には大変きついで、せめてこんなとき、雨でも降ってくれば一時的にも助かると思うが、なかなか降ってくれない。だけど、夜間はジャジャ降りで、この国はいよいよ働かす

ようにできているんだと思う。

キビトーク並びにその周辺には高い山などほとんどなく、見渡す限り丘で、せいぜい四十メートルぐらいの高台があつて、果てしなく広大だ。全体的に標高の高いところではないが、このような見晴らしのよいところを見る虹は、実に美しい。またそれ以上にスケールが大きく気味悪いのが稲妻だ。日本で見える稲妻はほとんど垂直に近い稲妻だが、シベリアの稲妻は、なぜあのようなになるのか。私にはわからないが、四十五度から五十度くらいで、長い長い稲妻を見ることができると。

作業を終えて、午後五時半ごろ、帰路のため、三十人はどが行進中、道端から十五メートル離れたところに一本の枯れ木があつて、高さは約三十メートルはあつたと思う。ピカ、ドン、落雷だった。意識的に跳び上がったのではないのに、全員二十〜三十センチ宙に浮いた。枯れ木の太木が二つに割れ、クスクスと燃えていた。

給与の悪いのは相変わらずだが、この時節になると、いろいろなものが手に入るが、十分注意しないと、これがために死ぬこともある。毒草、毒キノコ、サルノコシ

カケを食べて死んだ人もあった。私はこんな方法で選別した。キノコを見つけたらまず二つに裂いて「虫」が入っていれば合格。いくら形がよくても、大きくても、虫の入っていないキノコは捨てた。百合根は上等品だ。

二節より三節の方が根が大きい。だんだん上手に見分けられるようになって、それらの野草のお蔭で空腹をしのできた。その他シベリアで食べた野性のものは、イチゴをはじめ全部甘かった。やはり寒いところでは糖分が必要なのだろう。

しかし七、八月ごろに最高に困ることは蚊とブヨの襲撃だ。ラーゲルでは南京虫のメッカで、小さいころからなれて免疫にでもなっているのだろうか、羽根のない虫、ノミ、シラミには案外強かったが、羽根のある虫には全然弱い。それは現在もそうだが、シベリアの蚊は、まず大形で大量にいる。防蚊面をかぶると、網目に無数にとまって前が見えなくなるぐらいだ。決してオーバーな表現ではない。ちょうど、中支の南昌というところにいたときのハエのようだ。アルミ食器に飯を盛ると、白い飯が真っ黒になる。ちょっと思い出した。さて防蚊面

の網目をトントンたたくと、手が赤くなりたくさんとれるが、すぐたかってくる。

「秋」シベリアの秋は、アツという間に通り過ぎていく。何だか、夏からストレートで冬に突入するみたいだ。ここでもちょっとマムシについてふれてみたいと思う。昔、家の祖母などから、マムシを三センチも食べたら鼻血が出るよと聞かされていたが、シベリアで十センチほど食べたが鼻血は出なかった。健康身体であれば三センチで鼻血も出るのだろうか。捕虜の我々が作業中とかまた行進中に、だれかがマムシを見つけて叫ぶことがある。もうみなの目が輝いてとんで来て、我れ先にと捕らえる。私もマムシのお陰で助かったのではないかと思う。

五月ごろに出るマムシはやせている。冬眠から出たばかりだろう。黒色で約三十センチくらいある。何といっても毒蛇だから油断はできない。頭と皮はみんなの約束事だから、十五センチほど掘って埋める。身は丸めて布に包み、シャツの胸ポケットに入れると、三十分くらい動いている。シベリアでは一人では生活できない。私は

三人グループを組んでおったので、帰ってから三人で食べる。グループの三人共同作業に出る場合もあるが、別作業に三人とも分かれる場合があつて、今日は私が何も土産がなくても、他の二人がマホルカをもらつてくるとか、ソ連人の家掃除使役で帰りにパンをくれたとか、何かにありつけるのだ。一人ぼっちはつらい。

六月ごろにつかまえたマムシの腹に野ネズミの小さなものが三、四匹入っている。七月ごろのマムシの腹には卵が十個ほど入っている。三人組で卵焼きにして食べた。八月ごろのマムシの頭を落とし、皮をむくと、子供が飛び出してきて、早や噛みついてくる。マムシの子は大したものと思った。可哀相だけど我々が生きて帰れたのも、こんな野蛮な行動が、生に対する自己暗示をかけていたのではなからうかとも思う。死んでも食べるかと言っていた人で、亡くなられた人が何人かある。

「冬」シベリアの冬は地獄だ。まず日の出が十時、日の入りが十五時、明るいうちの食事は昼食のみ、朝・夕食は真っ暗で、電気が設けられるまでは、白樺の皮を燃やして明かりをとるので、顔も黒くなるが、鼻の穴が一

番黒い。実に非衛生的だ。

夏の太陽は沈まない。夜の十一時ころでも明かりなしで新聞が読める。太陽は地平線を這って午前三時ころにはもう昇ってくる。白夜だ。少し冬季に回してくれたらなあと思ったものだ。

三寒四温は夏場にもあるが、特に冬季ははっきり現われているように思った。入ソ当初の冬はマイナス二十五度以下のときは室内待機で、二十五度まで上昇してくると、レールの切れ端をつるした鐘がカンカンと鳴らされて、作業集合だ。二時間でも一時間でも作業に追い出される。入ソ二年目の冬は、マイナス三十度で作業に出された。シベリアの冬に馴れたらうということだった。入ソ三年目の冬は我々が思うに、リミット二十五度かな、なんて考えていたら、三年目の冬からは制限なし、お陰で、マイナス五十五度の中へほうり出された。これは私の記録だ。その様子にちょっとふれてみたいと思う。

まず感じるのは、警護のカンボーイもさすがに寒そうだ。薪の材料はたくさんあるから、ジャンジャン燃やす。大体日本の四畳半くらいの家が一軒燃えているくら

いに燃やす。火を中心に大体三十人ぐらいが円陣をつくってかこむ。前向きに当たると胸など前面が温まるが、背中と両脇腹、両腕が寒くて寒くて、背中を当てれば前面が寒い、右の方を火に向ければその他の部分が寒い……ちよūd一杯飲み屋の焼き鳥を想像すれば、火を中心にグルグル回る鳥並みだ。火から離れることはできない。だから作業は全然できず、プロ・ホ・ラボータで食事を減らされる。「働かざる者食うべからず」ちよūdときつい言葉だ。

そして冬装束は、靴下は幅二十五〜三十センチ、長さ七十センチぐらいの布二枚だ。上手に足に巻く。靴はフェルト製の長靴で、冬オーバーの上に毛皮のシューパーを着る。下着と服は当然着ている。手袋は軍手の上に、大手套といってウサギの毛が入った親指だけ分かれたものをする。防寒帽をかぶり、垂れをおろす。歩くより転んだ方が早いような格好でコロコロだ。それなのに寒いんだから体力が消耗する一方だ。しかしマイナス十度〜十五度ぐらいの気温で無風であれば、今日は暖かいと大喜びをしたものだ。上衣も手袋もはずして作業がで

きる。

私たちが入ったキビトク山の下収容所は、その後地区の第七病院となり、奥地からもタイセツ方面からも病人がそりに乗せられて入院してきた。中には到着したときすでに亡くなっている人もあった。病人で一番多いのは栄養失調で、次いで赤痢患者、原因不明の発熱患者だ。

実は私、武装解除され、蘭崗集合場所への途中、右脚一か所骨折、一か所ヒビの重症を負った。何の手当てもせず、捕虜輸送道中は泣いた。貨物列車の振動で骨折の箇所がピリピリ響く。痛いのを我慢して苦痛の毎日だったが、また戦友各位に大変ご迷惑をかけ、世話になった。ここに改めてお礼を申します。だから、私の捕虜生活は病人として始まった。その後手当てとして針金八番線と十二番線の組み合わせたものを包帯で太股から下、きびすまでを固定されて、やっと四カ月を経てはずしてもらうことができた。一番困ったのはトイレだった。

入浴は捕虜もソ連人も一週間に一度だ。しかし内容が違ふ。湯の量は捕虜一人当たり桶に二杯の湯、ソ連人は

桶に何杯でも自由だ。それにサウナが設けられる。月曜から金曜日までの五日間は、一日当たり二百人の計千人、日本人は一応終了、土曜日はカンボーイの入浴日だ。

ここでちょっとカンボーイの湯上がり風景を紹介しよう。まず彼らはタオルを使用していないので、トントんと跳ねて水を切るのと、手で身体をいきおいよくこすって水を切るやり方で、犬などのブルブル振るやり方をする。おおむね水が切れたら、シャツを着ながら拭く。日本でこんなことをしたら、親から風邪を引くよと叱られるのではないか。日曜日のはソ連人将校ほか家族の人が入浴に来るが、湯上がりにはタオルを使用している。日本の風呂や温泉のように十分温まるのではなく、五十センチほどのスノコ台に腰掛けて一杯目の湯でゴシゴシこすって垢をとり、二杯目を上がり湯として使うのだが、健康的な入浴とはいえない。

また、朝の洗顔にもカップ一杯の水が配給される。この水をどう使うか各人考える。窮すれば通じるで、何とかなるものだ。まず一口ふくんで、指で歯を磨き、次の

一口でうがいをする。最後に口に水をふくんで、徐々に手に水を落とし顔を洗う。

月に一度の身体検査は月末の入浴日に行われ、同時に衣類の滅菌消毒と丸刈り散髪が行われる。一つのバリカンで腋毛と陰毛を刈る。そして軍医さんほとんど女医さんだが、その人の前に進み出ると、前身を眺めた後「回レ右」と号令をかけられ、お尻の皮をひっぱり、その肉づきによって一級、二級、三級、オ・カ、あるいは入院と健康状態の区別分けをされる。

一〜二級は健康者（重労働に服務）

森林伐採、搬出、製材（枕木と板作り）、家屋建築、道路、鉄道路盤作業、枕木敷き、レール敷き、墓掘り

三級はやせた者（軽作業に服務）

炊事の水汲み他、補助勤務、浴場勤務、薪割り、薪集め、便所掃除、収容所内（庭）掃除

オ・カは作業免除の虚弱者で、室内掃除

作業はすべてノルマ制度だが、病気にもノルマ制に近い規定があって、日本人はこれに随分と泣かされてきた。発熱は三十八度以上の患者が休養か入室。人間には

個人差があるのに、一律三十八度以上が発熱患者なのだ。健康なときの平熱から一・五度か二度上がった者は発熱患者としてくれなければ、三十八度に一分足りなくても作業に出される。かえって悪くなってしまう。

こんな日本人が一人おった。検温直前にトイレに行くとかして、ちょっと活発に行動してくるのだ。そして検温したら三十八度が出る。これを軍医さんが見て「オ・スパーチ、ニエラボート、スパーチ、スパーチ」と。次に外傷患者だ。傷口が見え血が出ていると、すぐ「スパーチ」で休めという。だれが見ても怪我していることがわかる病気は、長くは休めないが、すぐ休めという。

私の場合、平熱が低く三十五度七分だ。一度や二度くらいの上昇なら何とか我慢もできるが、二度以上の発熱はつらい。それでも作業にダワイだ。こんなことが重なって、だんだん健康をそこなう人が少なくなる。軍医、女医にいくら言ってもわかってくれない。日常個人的に付き合って、このソ連人はいい人だなと思う人でも、ルールや組織の中のこと是一切融通はきかない。それは自分が監獄に入ることになるからだ。日本人に多い

神経痛やリウマチは外傷のように目に見えないので全然ダメだ。全員ダワイ、ビストレーラボートだ。次に多い痔の患者も「テイブイア、ヒートリー、ヒートリー」「ダワイ、ビストレー、ラボート」だ。

痔の判定については、こんな話がある。というのは、昔ソ連人の囚人が作業のつらさから逃れるために、尻の穴に糞殻やその他のものを詰め込んで一気に緊張して出すと、出血もするし、痔の症状も出て、病人扱いを受け作業が休めた。それが囚人仲間にだんだん流行して、それがバレて本当の痔の患者が泣かされるようになったのだ。日本人の痔の患者に笑みを浮かべて、ヒートリー、ヒートリーと言うのは、狡い狡いと言っているのだ。だから、神経痛、リウマチ、痔の患者は、ソ連では患者扱いをしてもらえず、みな作業に出された。彼らにいくら言っても通じなかった。このような患者は随分とつらい思いをしたことだろう。私は神経痛、リウマチ、そして痔がないが、平熱が低いので、発熱では泣かされた。

日本人は捕虜の経験がないので、今回の捕虜生活では

随分と要領の悪いことだった。「ハラシヨラポータ」は優先的に日本へ帰すと餌に出されれば、毎日毎日が帰りたい思いでいる捕虜の我々は、その心理をつかれてツイツイ無理して仕事をする目立つ。事実、その人は「ダモイ」のメンバーに入れられて帰国して行くので、ノルマ上がり、結果的には自分で自分のクビをしめることとなり、それけがまた健康を害した原因にもなっている。聞くところによると、独ソ戦では、捕虜にしたり捕虜になったりで、シベリアに來ているドイツ人の捕虜全員はせいぜいノルマの五〇％程度しか作業をしない徹底ぶりだそうだ。我々日本人は初めての捕虜経験なので、ダモイを餌にされるなどして、キツイ「ノルマ」をさらに上げる結果となった。

初めてお墓係を引き継いだときは泣きました。靈安室に積み上げられた遺体、そしてみな丸裸、そしてほとんどの遺体がやせている。松葉を刻んで焼香の代用品としたものだ。引き継いだ当初の日本人墓地は、山かげの湿地帯で、雪解けころだったので、埋葬者の手足が露出しており、埋葬しなおしたが、もし私が死んで、ここへ埋

葬されるのだったら私はいやな気がするので、せめて見晴らしのよい、そして陰気でないところだったらなあと思って、ナチャーニック、収容所長にかけあったところ、話のわかる所長で、カマンジル小森、お前が適當な場所を見つけてこいということになり、今までの墓地より少々遠く、かつ上り坂になるが、湿地帯ではない、ジメジメしていない、眺めは満点。丸太でここに日本人墓地ありと、印に困ったので、鳥居をつくってきた。およそ千二百〇三百人ほど埋葬されていると思う。

合掌

当時私も、中隊と呼ぶのは何だが、中隊長をしており、小森中隊を通過した人で、亡くなった人たちの遺髪、爪、官、氏名、病名と亡くなった年月日時刻等を書き小さな袋に入れて、ラーゲルを転出するときも忘れずに持ち歩いた。そして四年目にして、いよいよ待望の「ダモイ」の日が來た。タイシエトを昭和二十四年七月十五日に出発して、ナホトカに七月三十日着、乗船待ちの間、約一時間の道路掃除と、後はスパーチ、スパーチと寝かされた。また入ソ以來ナホトカで久しぶりの白飯

と牛肉の料理で、ちょうどブタを売る前と同じようなことをされて、顔は丸々していた。

八月五日、乗船（信濃丸）このときに「遺髪袋」がソ連兵に見つかり、日本に持ち帰ることあいならんということになり、ナホトカで茶毘にふす前、戦友各位の協力を得て、一人当たり二、三人の割合で死亡年月日他を覚えてもらい、焼却したので承諾が出た。乗船すぐ日本の海員さんに紙と鉛筆を借りて、戦友の皆さんにも忘れないうちに書き込んでもらい、生きて帰る者の務めとして最後までキチンとなし遂げた。

八月七日舞鶴港上陸、引揚援護局の係官に、上記紙片を当時の軍隊言葉で、確度甲として届けた。その数、実に七十数人だった。舞鶴平栈橋上陸後、赤痢患者が発生したので、全員消毒、その他検査があつて、八月十二日、帰宅のため、舞鶴引揚援護局を出発、同日、帰宅した。

ソ連参戦

島根県 八幡垣 正雄

時あたかも、ソ連がドイツとの戦いで勝利を収め、日本も既に敗戦間近というとき、その勢いを日本に向け、二十年八月九日、日本に参戦。我が部隊も南下作戦を開始。部隊全員がトラックに分乗し、兵舎及び各施設を爆破して出発するも、悪路にて前進不可能となり、車を乗り捨て行軍によってある駅に到達。その駅で南進する貨物列車兵隊専用に乗乗して出発する。

途中の鉄道沿いにもソ連の攻撃による被害が続出。その被害地附近で日本の婦人が足に傷を負い、「兵隊さん、助けて！」と絶叫していたが、いかんともなす術なし。恐らくその婦人は死んだであろうと今も心が痛む。当時は在満日本人婦女子の悲惨な状況を目にするかもしれない。しばあった。

その日の夕暮れ近く列車が牡丹江河の鉄橋にさしか